

## 【A ブロック授業研究会】

参加者：鳥取市 19名 岩美郡 2名

指導助言：鳥取市教育委員会 中澤 達也指導主事



### ○協議の柱

「ねらいに対して、本時のめあてはふさわしいものであったか」

「話し合い活動への支援は適切であったか」

### ○成果

- ・指導案に、意欲的でない児童、苦手な児童への支援が書かれているとともに、できる児童に対しての支援も取り上げられていた。
- ・「足を遠くに伸ばす」「まっすぐ」「大きく」などの、1年生がイメージしやすい言葉を使っていた。
- ・「支える」という観点から、単元の最初のころは言葉でアドバイスをし合っていたが、第4時あたりから手で支え合っている様子がよく見られるようになった。
- ・「手ーパー」など、技能の獲得につながるキーワードが盛り込まれ、しかも運動量が十分に確保されており、技能の獲得に十分な活動であった。
- ・運動量が十分に確保されていた授業だった。場の工夫によって楽しさをも味わうことができていた。転がる楽しさを多くの児童が味わっていた。何度もチャレンジする姿に表れていた。最後にポーズをする児童もいた。

### ○課題

- ・単元を通して身に付けさせたい力の具体的到達イメージが認識できていないと、どこに向かっていけばいいのか児童が分からないので、前ころがり、後ろころがりのイメージを明確にもたせるよう努めた。
- ・単元前と後の技能の変化(向上)様子や変化が分かるよう、動画を撮って残しておくことも有効である。自己評価できたり、自己の成長を感じられたりする評価方法となる。
- ・ICTの活用。到達イメージをもたせるための大切な手段である。映像やビデオなどを用いてイメージの共有化とプロセスの共有化を図っていくと良い。
- ・本授業は「技能」がフォーカスされた実践であると言ってよい。本研究領域でも、「技能」に焦点を当てて研究を進めていってもよいのではないか。
- ・「技能」の向上を図るためには、「知識」(分かる)も大切。分かるということは言語化できるということ。体育的に価値のある言葉を教える、または児童から引き出すということも大切。